

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足
小津安三郎

④ フランス文学者 柏木隆雄

前回説いたデカルトの「方法序説」は、さらに特記すべきことがある。それは欧州の学界を驚かせたこの名著が、学術書の常識だったラテン語で書かれず、平俗とされたフランス語で書かれていることだ。1697（寛永14）年の初版タイトルは、「理性を正しく導き、諸科学において真理を探究するための方法についての説、およびその方法を使って試みた屈折光学、氣象学、幾何学論」という長々し

いもので、全体で500ページを超える。序文の「方法論」80ページ足らずが、今に名著として読まれることになる。

19（元和5）年、ドイツ神聖ローマ帝国対フランス、スウェーデンとの「三十年戦争」に従軍した24歳の冬、ドナウ川左岸のウルムの農家に駐屯、深い思索を重ねたデカルトは、新しい学



ハルス画デカルト像
(ルーブル美術館蔵)

問の方法を発見する。その体験を語る文章は実に感動的で、それこそ「難しい……」と決め付け

る市井のフランス語でつづつた。保守的な学者たちは卑しんで読むまいと考えたのか。いや、

デカルトと宣長、類似

自分が発見した学問のポイント、「自分で考える、自分が考える」ことを、万人に伝えたい思いが強かったからに違いない。

西洋のラテン語は近世日本での漢文

このラテン語に当たるのが日本での漢文だ。古来正統の文書は漢字のみでつづられ、漢字の行書、草書から仮名文字が発明され、宮中の女官がそれらを用

されて、全文漢字。「万葉集」も音標として漢字で表現されるが、「古事記」では単に音標文字としてだけでなく、漢文として体裁が整う。そのためかえて難解となつて、古来宮廷の学者たちが「古事記」の解説を試みてきた。

その努力が江戸時代に入つて、大きな形で実つたのが、本居宣長の「古事記伝」だ。その著作が画期的なのは、前回説いたデカルトの明証、分析、総合、枚挙の4規則を自ずから踐（ふ）んでいること、漢文を用いずに仮名文字で明快に記されていることである。（毎週土曜掲載）

自分が発見した学問のポイント、「自分で考える、自分が考える」ことを、万人に伝えたい思いが強かったからに違いない。

【柏木隆雄さん（76）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者 柏木隆雄

目の前で示される事柄を、易しく、また正確に理解するためには、自分の耳でよく聞き、自分の眼で確かめ、さらにそれを自分自身の体験と知識とに照らし合わせて、頭の中でよく整理し、自分なりの考えをまとめる。これが大切だと前回書いた。これは「われ思う、ゆえにわれ在り」で知られる17世紀フランスの哲学者、ルネ・デカルトの受け売りだと悟った読者も多かる。

戦前の昔、旧制高校の学生が



デカルト「方法序説」(1637年初版) パリ国立図書館蔵

酔っ払って「デカンシヨ、デカンシヨで半年暮らす、ヨイ、ヨイ」と大声で唱(うた)ったが「デカンシヨ」は、一説に「デカルト・カント・シヨペンハウエル」を約(つづ)めたものだが、17、18、19世紀の哲学を彼ら3人に代表させたところは、なかなか馬鹿にできない。「私は考える、だから私は存在する」なんて、当たり前やないか、と返したくなるが、自分が見たり、聞いたたりしたこ

なぜ「デカンシヨ」?

とについて、その全てが本当かどうかを疑いだすと、確かに、どれもみな怪しくなってくる。遠くで四角と見た建物が、近づいてみれば円筒形だったり、楽しい経験が実は夢だったりする。今現に目の前にあること、していることさえ、実は夢かも知れない。こうして何もかもを

して存在する。

デカルトの理知主義 科学発展の基礎

そこでデカルトは「考える」行為の持つ意味に気が付く。すなわち自分が「疑っている」という事実は確実で、そこから「考

える主体」としての「私」が事実として「存在」することに。真実に至る道筋は四つある、と彼は言う。まず、明証的に真であると認められたもの以外は、決して受け入れない(明証の規則)。

次に、考える問題をできるだけ小さい部分に分け(分析の規則)、さらに最も単純なものから始めて、複雑なものへと至り(総合の規則)、そして最後に何一つ見落とさなかったか、全てを見直す(枚挙の規則)。

デカルトの真理探究の方法は、以後西洋近代合理思想の根本となり、19世紀の「実証主義」へと導いていく。

「実証主義」は、ある事柄について、それが事実である証拠を徹底的に調べ上げ、主観を退けた確固とした形で提示する。「実証主義」に基づいて諸科学は発展し、今日の進歩の基礎を築くことになった。

この知を織り成していく作業の方法は、近代西洋に限らない。それが日本にも、しかも18世紀の江戸時代すでに見られる。そのことはまた次回。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(76)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」(翻訳にバルザック著「暗黒事件」など)。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者 柏木隆雄

先号で宇田荻郵を知らないとい書いたら、たちまち姉たちから第一小学校の講堂に彼の「築やな」だったかが掲げてあったよ。大抵の人は覚えてはいるはず！と笑われた。それに松阪名誉市民第一号は、松工の大先輩丹羽保次郎氏で、2015(平成27)年、その没後40年に校門を入って左に顕彰碑を建て、碑文を私自身が書いたことを思い出した。荻郵は第2号となる。落語界の桂文我さんや笑福亭生喬さんは、現在活躍している松阪人だが、3年前の2018(平成30)年7月、その文我師

『心の中松阪』出版記念「松阪あれこれ」
桂文我・笑福亭生喬の落語と
柏木隆雄のフランス文学者



7月17日(月・祝)
午後1時開演(12時30分開場)

●場所/松阪産業振興センター3Fホール
●料金/前席2,500円(税込) 当日3,500円(税込)

と「二人会」を松阪産業振興会館で催した際、遠い山口市から小津久足(ひさたり) 研究の第一人者、菱岡健司先生も聴きに来てくださった。私の話は菱岡先生の聴取を当て込んだわけではなかったが、松阪といえばやはり鈴屋大人(すずのやのうし) 本居宣長と長男奮庭、その弟子の小津久足、久足の後裔(こうえい)小津

「知へ」本質はどこなのか

安二郎と思いついての三題噺(ぼなし)。果たして私の話が専門家の耳にどう聞こえたか。翌日の「夕刊三重」のコラム「松阪」で記者の懇切、明快な報告

の「三人会」で、私の演題は「フランス文学は色っぽい?」。終わった後、友人たちは文我さんや生喬さんの落語はほんとに面白かったが、おまえのは難しかったわ、と口をとんがらせる。私はこう弁解した。「フランス文学」は難しいと考えるから

をうれしく読ませてもらった。仏文学は難しいと最初から決めないで「二人会」の仕掛け人桂文我さんに誘われて、初めて松阪の「高座」に上がったのは、その前年の17年7月。私の生家の隣人でもある生喬さんも参加して

難しくなるのではないか。人の心の機微を、人生のさまざまな状況に応じて、的確に表現しようとするのは日本の小説と同じで、フランス文学の場合、本能や欲望をあるがままに認め、それを率直に、あるいは多少のユーモアや皮肉のオブラートに包んで表現するから、かえって分

かりやすいこともある。内容そのものは柔らかく、易しいのに、「文学の話は難しいぞ」と顰(よろい)や兜(かぶと)で身構えてしまっ、最初から分らないと決め付けてしまうのではないかしら。

4年前の「三人会」のちりし
自分の耳や目で確かめること
そう難しく考えず、といつてむやみに軽くも考えないで、た
小津久足 1804~58年。商人で蔵書家、紀行文作家。

【柏木隆雄さん(76)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町に生まれる。松阪工業高校から住友金属工業(株)勤務の後、大阪大学で学ぶ。現在大阪大学、大手前大学名誉教授。フランス文学専攻。著書に「バルザック 詳説」「翻訳にバルザック著、暗黒事件」など。

だ目の前に示されたものについて、その本質がどこにあるか、与えられた情報が本当に正しいのかどうか、自分の耳や目で確認することが大事だと思う。そうすれば難しいと思ひ込んでいたのも、実際は、するつと納得できたりするはずだ。
みんなの好きな落語と同様、文学も笑いや涙を誘う中に、実は奥深い知恵や真理が説かれる。誠に得がたいものだと思う。文学通りわが田に水を引く私の言葉に友人たちがうなずいてくれたかどうかはともかく、次稿でそうした「知」を得、それを広めるために苦心した古人の話をしたい。(毎週土曜掲載)

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足
① 小津安三郎

フランス文学者
柏木隆雄



新型コロナウイルスの流行が収まらない。1991(平成3)年からほぼ毎年三重日仏協会から招かれて津市で行ってきた文芸講演会は、昨年は中止。今年も開催が危ぶまれたが、コロナ禍で人数制限の上開催され、19世紀フランスの挿絵画家について私が、そして第20回目を記念

して(?)初めて妻が参加、フランス人浮世絵収集家について話した。講演を聞いておられた夕刊三重新聞の山本記者から、京都市立芸術大学で長年仏語仏文学を担当してきた妻に、芸大の先生に宇田荻邨(うだ・てきそん)という方がいるはずだが、ご存知か?と尋ねられて、

松阪の偉人、知っていますか?

私が、その名も作品も知らないのは誠にうかつ千万ながら、案外郷土の偉人について知らないままの人が多いいのではないかと。例えば宣長の名前は知らない人はいなからうが、宣長の実像となると、せいぜい「松坂の一夜」

くらいで、それさえ戦前の教科書に載っていたからで、今の子供たちは漠然とした形でしか知らないのではあるまいか。まして長男春庭の仕事やその弟子で江戸時代最大の紀行文作者小津久足(ひさたり)やその膨大な

蔵書を取めた西荘文庫のことなど、あまり詳しくは知られていないような気がする。
3氏の側面を分かりやすく

(毎週土曜掲載)

私はもちろん、妻もその名を知らなかった。松阪出身の著名日本画家で松阪市名誉市民第1号という。帰宅して調べてみると、なるほど荻邨は京都市立絵画専門学校別科を出て36(昭和11)年に同校の教授となっている。その後身である京都市立芸大に78(同53)年から勤めた妻には耳遠い名前だったようだ。

名誉市民第1号は 日本画家の宇田荻邨

三重県立美術館に荻邨のコレクションもあるそうだが、それにしては高校まで松阪で育った



1940(昭和15)年の京都市立絵画専門学校の卒業写真。前列右から6人目が荻邨

もとより私自身、日本画家の荻邨についてと同様、宣長、久足について専門外で詳しくないのに、誠に僭越(せんえつ)な物言いで恐縮だが、乏しい知識しか持ち合わせていないにせよ、専門外であればこそ、気楽に、しかしできるだけ私の分かる範囲で正確に、そうした松阪の偉人の側面を知ってもらうことは意義あることではないか。

はかばかしく山本記者の質問に答えられなかったのを、かえってよいことに、夕刊三重の読者に宣長、久足、その後裔(こうえい)の映画監督小津安二郎について書いてみるのはどうだろう、と厚かましくも提案してみた。2011(平成23)年9月から13(同25)年1月まで1年半ばかり、本紙で「心の中の松阪」を、合わせて66回連載させていただいた。今回も同じ形で話を進めさせていただこうと思っている。読者諸賢のご愛読を賜れば誠にありがたい。

【柏木隆雄さん(76)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町に生まれる。松阪工業高校から住友金属工業(株)勤務の後、大阪大学で学ぶ。現在大阪大学、大手前大学名誉教授。元フランス語フランス文学会会長。フランス文学専攻。著書に「バルザック詳説」(翻訳)「バルザック著、暗黒事件」など。